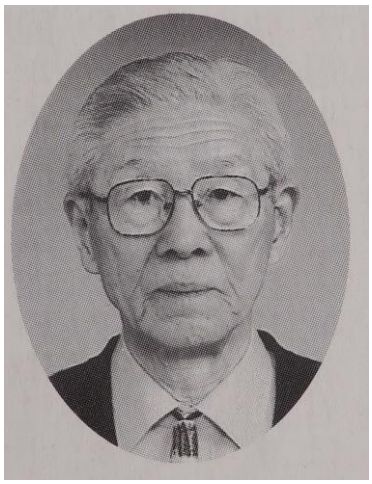
特別寄稿　思い出

「百周年記念に間に合わなかった若駒会館のこと」(※1)

中第 40 回卒　齊 藤　　浩 (※2)



母校相馬高校が、今年創立百十周年を迎えましたこと誠におめでたく存じます。

10 年前、百周年での記念事業推進に携わった者として、今日、思いを新たにしてお祝いを申し上げられることはこの上ない喜びに存じます。

先日母校を訪問した折、若駒会館はその後如何かとまずはご対面といきました。立派な新校舎を背景にして変わりない姿であったこと、心休まるのを覚えました。

平成６年２月、馬城会副会長としての私は、このとき発足した創立百周年記念事業実行委員会で事業部会担当となりました。

この部会の最大の課題は、記念事業全体の中でも目玉とされた若駒会館の建設でした。費用も全体枠の 40%に当たる４千万円とされました。

若駒会館は、竣工まで６年余もかかり、平成 10 年 10 月時点では未着工の状況で、栄えある記念式典に参列しながら、当事者として、重い宿題を背負った感じを持たざるを得ませんでした。

若駒会館は、平成 12 年いわば母校の百十周年への歩みの中で完成したので、新校舎・男女共学制がこの２年半後にスタートしたこととの絡みで言えば、この新体制の先駆けになったかと思ったりもします。

振り返ってみれば、この建設については長期にわたったこと、二度の設計になったことなどの思い出が浮かんできます。

その第一は、最初の段階での県教育委員会との打ち合わせにおいて、新会館は馬城会館の増築としてその東側に建設することとの方向が示されたことです。

この指針に拠ることになれば、用地の事情からして二階建て・四角い箱型の姿しか考えられませんので、若駒のような伸びのびしたものを心に描いていた手前、いささか気の重い受けとめとなりました。

設計を引き受けていただいた遠藤陶さんには、このような条件にも拘らず、創意を織り込み創立記念に相応しい立派な会館設計を作りあげていただきました。

関係先との各種調整を終えて建設の段階に入ろうとした平成９年中頃に、今度は校舎改築問題との整合性が課題になってきました。

結局、同年 10 月に至って会館建設は延期することになってしまいました。

第二点としては、平成 10 年末に校舎改築の方向が固まりましたが、これに伴って会館設計は全面的に見直しになったことです。

校舎改築の具体化によって、こちらの関連では、講堂と馬城会館はそのままとし、若駒会館は馬

城会館の西南側とするということになりました。

この変更は、若駒会館にとって好都合なことでありました。それは、かねて考えていた大屋根式の平屋建て・多角的利用に適するものが可能となり、且つコの字型に講堂と馬城会館をつないだ落ち着いた配置になるからです。

▲若駒会館の内部（2008年９月）

遠藤さんも同じ見解をお持ちで、早速に第二次設計に精力的に取り組んでいただきました。多くの手続や必要な補正などを経て平成 11 年半ばには建設段階に移り、その年末には指名競争入札による施工業者の決定、明けて 12 年２月地鎮祭を行って工事着手、７月完成と相成りました。

８月、馬城会総会でその完成を報告し竣工披露を行いました。この時をもって実行委員会はその役割を終え解散となりました。

設計者の遠藤さんには、終始献身的に設計管理に取り組んでいただき、お蔭様で立派な記念物＝若駒会館の誕生を見ることが出来た次第であります。

第三、設計者の遠藤陶さんについて

遠藤さんには、その後も使用上生じた問題について、その都度対応をお願いして今日にいたっております。

遠藤陶さんは、遠藤新 (※3) さん（著名な建築家で相馬中学第６回卒業生）の三男で、父君の直々の薫陶を受けて建築家になられたと聞いております。

若駒会館の設計をお願いしたところ、これは大変に名誉なことであり、相馬中学卒業生である亡父遠藤新が拝命したものと受けとめお引き受けしますということでした。

このようなお気持ちから、お願いした当初に、設計料はお受けしませんとの申出がありました。結局、第一次分については無償で奉仕をいただいたことになりました。

設計に当たっては、建物の形・内容・使い勝手など多くの点で遠藤新流の発想を活かしたということであり、遠藤さんは、この若駒会館について特別に厚い想いをお持ちのように拝察しております。

このたび、今日現在の心境を伺ったところ、次のような感想を寄せて下さいました。

一、利用については、補習が主となっているらしいが、在校生と卒業生の接触の場、また各種展示や講演会・発表会など多角的に活用してほしい。

二、設備面では、冬の暖房の効きが弱いので床暖房がほしい・・・ということでした。

設備や装置については、必要な改善を施して使い勝手をよくし、末永く有効利用していただきたいとの願いは私も全く同感に存じます。

母校相馬高校が、創立百十周年を機に更に充実発展されますよう心から祈念申し上げます。

（※１）『 紅の旗　創立百十周年記念誌 』　〈 2009（平成 21）年１月発行 〉「特別寄稿」。

（※２）　中村出身。昭和 17（1942）年卒。東大（経）。元東北電力（株）、元東日本興業（株）。

馬城かわら版 第 251 号「若いエネルギーを気力、知力、体力として発露させよ」

（※３）福田村出身。相中第６回、明治 41（1908）年卒業。東大（工）。建築家。

（ 転記&※脚注　村山 ）